（様式1）

令和5年度　学力向上指導改善プラン

三輪小学校長　田中　智久

学校教育目標	人も自分も・学校もふるさとも大切にできる子の育成
推進主体	管理職と教育課程担当者および学校教育改革推進委員会を推進組織とする

学力に関する前年度の状況・経年の課題等

学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語	○「読むこと」では全国平均を15ポイント上回っている。児童の実態に応じた国語の研究を継続し、授業改善を進めている成果の表れと言える。 ○「話すこと、聞くこと」では全国平均を3ポイント上回っている。朝の会のスピーチ、少人数の話し合い、ペア学習、グループ活動や児童会活動における異学年での意見の出し合いなど、話す機会を継続している成果の表れと言える。 ◆「書くこと」では、漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くことに課題が見られた。「○字以内」「～を使って」等条件をつけて書く練習や、社会・理科・総合などでの新聞作りを取り入れたり、各教科で振り返りを書いたりする習慣を身に付けて目的意識をもって書くことが必要である。
		算数 数学	○全ての分類・区分において全国および兵庫県の正答率を上回っている。特に「数と計算」「図形」「データの活用」「思考・判断・表現」「記述式」の5つの分類区分において、全国の正答率を10ポイント以上上回っている。兵庫型学習システムにおいて少人数での授業を行うことで、きめ細やかな指導や支援を行っている成果と言える。 ◆思考・判断・表現は全国および兵庫県の平均を上回っているが、ポイントは低い。「解く型」は身に付きつつあるが、問題の表現が変わると文意を読み取れない児童がいる。 ◆身の回りの事象と算数の問題を関連付けて考えることがむずかしく、「実生活に結びつけた活用問題」を解くことが課題である。
		ICT機器を効果的に活用した取組状況	○学習活動に積極的にICT機器活用を取り入れていることで、毎日使用50%、週3回以上使用約30%という結果に結びついた。また、タブレットが学習の役に立っていると回答した児童が75%と高い。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）		○兵庫がんばりタイムにおいて、次単元に向けて既習内容の復習や課題のある問題に取り組むことで不安や苦手意識を軽減することができたと考えられる。 ◆記述式で回答する問題になると、安易に無回答にしてしまうことがある。粘り強く書くことに取り組んでいく必要がある。
	授業等からうかがえる状況（各教科）		◆学習には意欲的に取り組むことができるが、話し手の意図を捉えながら、最後まで聞くことに課題がある。 ◆学習のめあてや振り返りを書くことの習慣化、質的向上を図ることにより、自分の成長を実感させていく必要がある。
学力向上に係る学習習慣・生活習慣等の状況	全国学力・学習状況調査の質問紙の状況		○生活習慣（朝食、夕食、睡眠）に関する設問については、いずれもほぼ全国・兵庫県水準を上回っており、家庭でも意識されていると言える。 ◆テレビゲームや動画視聴にかかる時間の調査では、4時間を超える児童も多く、家庭学習の習慣化に向け引き続き啓発の必要がある。 ◆学校以外での読書時間について、全国や兵庫県のポイントを大幅に下回っている。
	学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○授業に対して、91%以上の児童が「わかる」と感じ、89%以上の児童が「楽しい」と感じていることから、学習意欲の向上が見られる。 ◆家で本をよく読む児童の割合が低く、家庭での読書週間の構築が課題である。読書の楽しさや価値を伝えていくことを通して、本を読みたくなるような工夫を続けていくことが必要である。
校内の研修の状況・研究	校内研究の状況		○『考えを深めたり広げたりすることができているか』との問いについて、全国・兵庫県を上回り85%に達しているのは、伝え合うことを中心とした校内研究の効果によるものである。
	校内研修の状況		◆全国学力・学習状況調査の分析を学校改革委員会で分析し、職員会議等で共有し、課題解決に向けて取り組みたい。 ◆児童の実態から「ついたカ」と「これからつけたい力」を明らかにし、「めあてと振り返り」「ノートの取り方」等学習スタンダードを共有する。
家庭・地域・校種間連携	家庭・地域等の状況		◆本年度も、家庭学習を進める環境を整えることができるよう、各学年に沿った「家庭学習の手引き」を作成し、保護者や児童に啓発する。（経年）
	小・中における教科連携等の状況		◆八景中学校区の小学校で連携して、課題「運動（なわとび）」「読書」「自主学習」を共有し、取り組みを進める。 ◆情報教育に関して、マナーやタブレット操作についても共通した目標をもって取り組む。

4月

学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標（指標となる数値等）	具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）
粘り強く学習に取り組む「みわっこ」の育成	・全国学力・学習状況調査における国語の言語事項を3ポイント昨年度より向上させる。 ・算数での基礎的な計算力の定着により、計算問題で全国平均を上回る。 ・算数での「思考・判断・表現」に関する項目の平均正答率を昨年度より3ポイント向上させる。 ・学校評価アンケートにおいて「基礎的な学習が定着してきた」に関する児童アンケートの結果が前年度を上回る。 ・全国学力・学習状況調査における無回答率を前年度より減らす。	・各教科で授業の振り返りを書く習慣を定着させる。目的意識を持って書かせるようにする。 ・条件を踏まえて書いたり、量を書いたりするような、目的意識を持った書く活動を設定する。 ・兵庫型システム教員を中心に、朝の学習における算数の基礎練習支援を行う。計算力を高めるようにタブレットを利用したりプリントを工夫したりするとともに、児童自身が自分の学力の高まりを実感できるようにする。 ・課題解決に向け、自己の考えをまとめる一人学びの時間を授業に位置づける。 ・思考ツールやICTを活用して伝え合う力を高めることで、他者の考えと自分の考えを比較したり分類したりする活動を仕組み、「思考・判断・表現」の力を伸ばす。
家庭における学習習慣の確立	・学校評価アンケートにおける「学び合う輪」に関する保護者の値が前年度を上回る。 「学び合う輪」 ・学校の勉強はわかりやすい ・本読み漢字計算など基礎的が学習が定着 ・人の話をしっかり聞くことができている ・自分の意見をしっかり相手に伝えることができる ・家庭学習の手引きを活用し、進んで宿題や学習の準備をする ・進んで読書をする	・「家庭学習の手引き」を児童全員に配布し、家庭学習の計画を立てさせるとともに、定期的に振り返りを行う。 ・発達段階に応じた自主学習の課題を設定して、自主学習ノートを定期的に提出する。 ・学年×10分を目標として学習する習慣づけを行い、余った時間は自主学習や読書などに活用する習慣を身に付けさせる。
読書活動の充実	・学校評価アンケートの子ども・保護者とも「家でよく読書をしている」「目標を立てて、読書に取り組んでいる」の項目をいずれも70%以上の肯定的評価を目指す。	・毎月23日を「家族読書の日」とし、読書通帳を活用した読書の習慣をさらに定着させる。 ・学校司書や学校ボランティアによる読書活動の取り組みを推進する。 ・百冊達成の表彰をすることで、児童の読書への関心と目標を立てて取り組む姿勢を育てる。 ・読書週間を設定して家族で読書に取り組めるよう支援する。
「伝え合い、つながり合う三輪っこの育成」のテーマにそった研究の推進	・年間計画を作成し、一人一授業を公開する。 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にして教職員で交流する。 ・校内研究の振り返りにおいて、研究の成果を感じているという評価が80%を超える。	・研究推進部会を中心に、授業づくりの基礎について研修し、共通理解する。 ・実践記録を通して、お互いの実践の価値や課題を共有する。
学力向上に向けた保幼小中高の連携（八景中学校区）	・八景中校区で設定されている各部会を定期的に開き、学力・学習状況調査の分析を行う。 ・八景中学校区の課題について共通理解する。	・授業参観や意見交流の場を持ち、共通の課題について検討する。 ・進んで「自学」、どんどん「読書」、元気に「運動」の取り組みの具体について、学校改革委員会の場で交流する。
幼児期と児童期の円滑な接続推進に向けた取り組み	・「幼児期と児童期の円滑な接続推進事業に係る実践研究」を進めるため、三輪幼稚園との定期的な交流の場を設定する。	・年間を通じた継続的な学校園所交流を計画的に行う。 ・学校園所の授業参観や意見交流の場を積極的に持つ。 ・保幼小接続カリキュラムを見直し、円滑な接続を図る。

2～3月

年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
○日々の学習において、間違った問題をそのままにせず、やり直しや再テストを徹底したことが基本的な知識の習得、定着につながったと考える。 ○普段から個人思考の時間を確保することや「問い」を自ら持たせることを意識して授業づくりをし続けたことにより、子どもたちにじっくりと問いに向き合う習慣が身に付いたと考える。 ○兵庫型システムにおいて、ハーフサイズでの授業を行うことで、細やかな指導や支援を行ったことが効果として表れている。 ○兵庫がんばりタイムにおいて、次単元に向け既習内容の復習や、課題の見られる問題に取り組むことで、不安や苦手意識の軽減につながった。 ◆「書く」ことに苦手意識を持っている児童が見られることから、「自分の考えを文章にして表す」活動に低学年から取り組み、書く活動に対する抵抗や苦手意識を持たないように仕向けていく。 ◆国語科にかぎらず、算数科や社会科などの授業においても、表やグラフから読み取り文章化する学習に取り組んでいくことで情報活用の力を高める必要がある。 ◆感染症下で取り組みを控えていた「体験活動」を充実させ、表現力やコミュニケーション能力を育成していく。	A
○自学ノートを導入して宿題以外の自主学習の習慣化に努め、各学年に応じた自学が進められている。 ○タブレットの週末持ち帰りにより、アプリケーションを活用した自主学習が行えるようになった。スキルを高めるドリル学習のほか、調べ学習にも役立てることができた。 ◆家庭学習には「学習の手引き」を活用するように促してきたが、学校評価アンケートからも十分でないことがわかる。引き続き保護者に対する啓発を行ったり、定期的な振り返りの時間を持つことを通して、意欲的な学習につなげるための工夫について検討していく必要がある。	B
○学校司書教諭や地域ボランティアによる読み聞かせ活動が充実しており、学習の合間や休み時間にも本に親しみ本を手に取る児童の姿がよく見られる。 ○委員会活動を充実させ「図書まつり」を開催したり幼稚園への読み聞かせを行ったりすることで、子ども自身が主体的に目的を持って読書することにつなげることができた。 ◆「家族読書の日」に学校全体として継続的に取り組むことで、学校から家庭へと読書の大切さを意識的に伝えているが、学校評価アンケートからも十分でないことがわかる。通信等を通じて読書の楽しさや価値を伝えたり、タブレットを活用した多様な読書形式のあり方についても検討していく必要がある。 ◆高学年での読書時間の確保が難しかったため、来年度は図書館司書教諭の協力も仰ぎながら朝学習の中に本の貸し借りの時間を設定していく。	B
○校内研究については、昨年度からの積み重ねもあり、思考スキルの活用による思考力の向上に全教職員の共通理解のもと、取り組むことができた。学団を中心として成果と課題を明確にしながら授業研究を進めることができた。 ○来年度の県指定研究「幼児期と児童期の円滑な接続推進事業」を見通して、定期的に幼稚園との交流を図ることができた。そこから見えてきた学校の課題「つなぐ」をテーマとして今後の研究を進めていくことを全体で共通理解することができた。 ♦授業をお互いに見合う意識を高めていく必要がある。	B
○本年度も八景中校区で、課題別の部会を開き、基礎的な学力の定着に向けて話し合いを進めることができた。 ○「なわとび」に関して、委員会や体育の授業において2学期に集中して取り組むことで力を伸ばすことができた。 ◆「読書」については、学校評価や質問紙などからも十分な結果ではない。特に家庭での読書習慣については引き続き課題として対策を考えていく。	A
○4つのキーワード「人をつなぐ」「学びをつなぐ」「家庭・地域をつなぐ」「未来へつなぐ」をテーマとして、幼稚園交流、接続期のカリキュラムの見直しなど、計画的に取組を進めることができた。	A